

(7) 国際分業の進展の状況

我が国の産業・貿易構造は、対外直接投資の増加、海外生産比率の拡大とこれに伴う製品輸入の拡大など大きな変化をみせている。95年調査以降も輸入は増加基調で推移しており、特に製品・半製品の輸入は増加の一途を辿っている。品目的にも、衣類など労働集約的な非耐久消費財に加え、近年の情報化の進展に伴い、パソコンなどの輸入増加が顕著となっている。このような国際分業の進展に伴い、製造業を中心とした国内産業の空洞化が懸念されている。全国貨物純流動調査（年間調査）では、貿易量については詳細な調査をしていないが、ここでは製品輸入に対する関わりや、製品輸入の増大によって受ける影響が大きいと考えられる業種として、製造業8業種（食料品、衣服・その他繊維製品、家具・装備品、金属製品、一般機械器具、電気機械器具、輸送用機械器具、精密機械器具）を選び、純流動調査の結果および他の統計指標を用いて、95年調査に引き続き、国際分業の進展（産業空洞化）の動向についてみる。

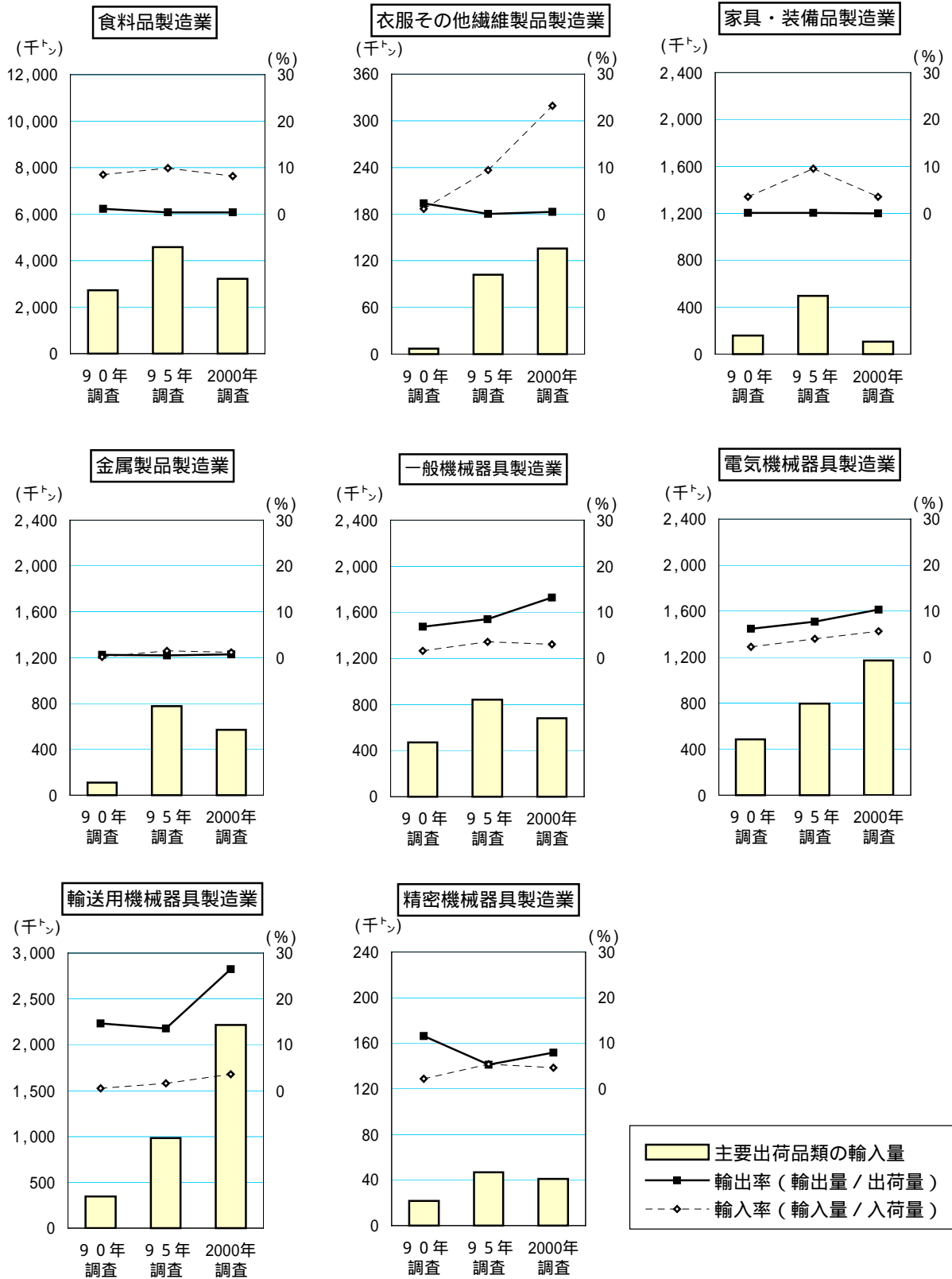
まず、輸入量のうち主要出荷品類と同一品類の輸入量をみると、衣服・その他繊維製品、電気機械器具、輸送用機械器具の3業種を除く5業種において、輸入量が減少している。これらの業種においては出荷量も減少しており、国内需要が冷え込んでいたことに加え、輸入量の中には原材料系の貨物も含まれることから、生産活動そのものが停滞していたことがうかがえる。一方、電気機械器具など上記3業種は、出荷量が減少しているにもかかわらず輸入量は増加しており、部品や半製品の調達面で輸入の依存度が高まっている傾向が示されている。輸出率（輸出量/出荷量）は食料品、家具・装備品を除く6業種で増加している。これらの業種についても出荷量は減少しており、海外生産拠点への部品供給などの増大に加え、国内消費の伸び悩みにより相対的に輸出率が上昇しているものと推察される（図3-3-39）。

次に、各業種における輸出量と、主要品類の輸入量を用いて便宜的に算出した輸入浸透度〔主要品類輸入量 / (主要品類出荷量 - 主要品類輸出量 + 主要品類輸入量)〕の推移をみる。なお、95年調査以前は輸出量を品別に調査していないので、輸出量の全体を主要品類の輸出量（例えば食料品製造業ならば軽工業品、電気機械器具製造業ならば金属機械工業品）とみなした。この輸入浸透度については、90年 95年にかけてはすべての品類で上昇している。また、95年 2000年では、衣服・その他繊維製品、電気機械器具、輸送用機械器具の3業種で引き続き輸入浸透度が上昇しているが、食料品、家具・装備品では輸入浸透度が低下している（図3-3-40）。

このように、国際分業の進展に伴う国内産業の空洞化は、便宜的に算出した輸入浸透度でみる限り、機械系製造業や衣服・その他繊維製品製造業を除き一段落しているように見えるが、これはあくまで国内製造業に限定して輸入浸透度をみたものである。実際には、商社や小売業などが直接輸入しているケースもあり、また、95年 2000年において輸入浸透度が減少あるいは横ばいであった製造業についても、従業員数、事業所数の推移をみると双方とも減少傾向にあることから、実際には95年 2000年においても国際分業の進展とこれに伴う国内産業の空洞化は進行しているものと推察される。

図3-3-39 主な業種別にみた輸出率・輸入率及び主要出荷品類の輸入量の推移

(年間調査 単位：千トン，%)



注：・各業種の輸出入量の仮定の方法

食品製造業の輸出入量は、軽工業品の輸出入量と仮定。

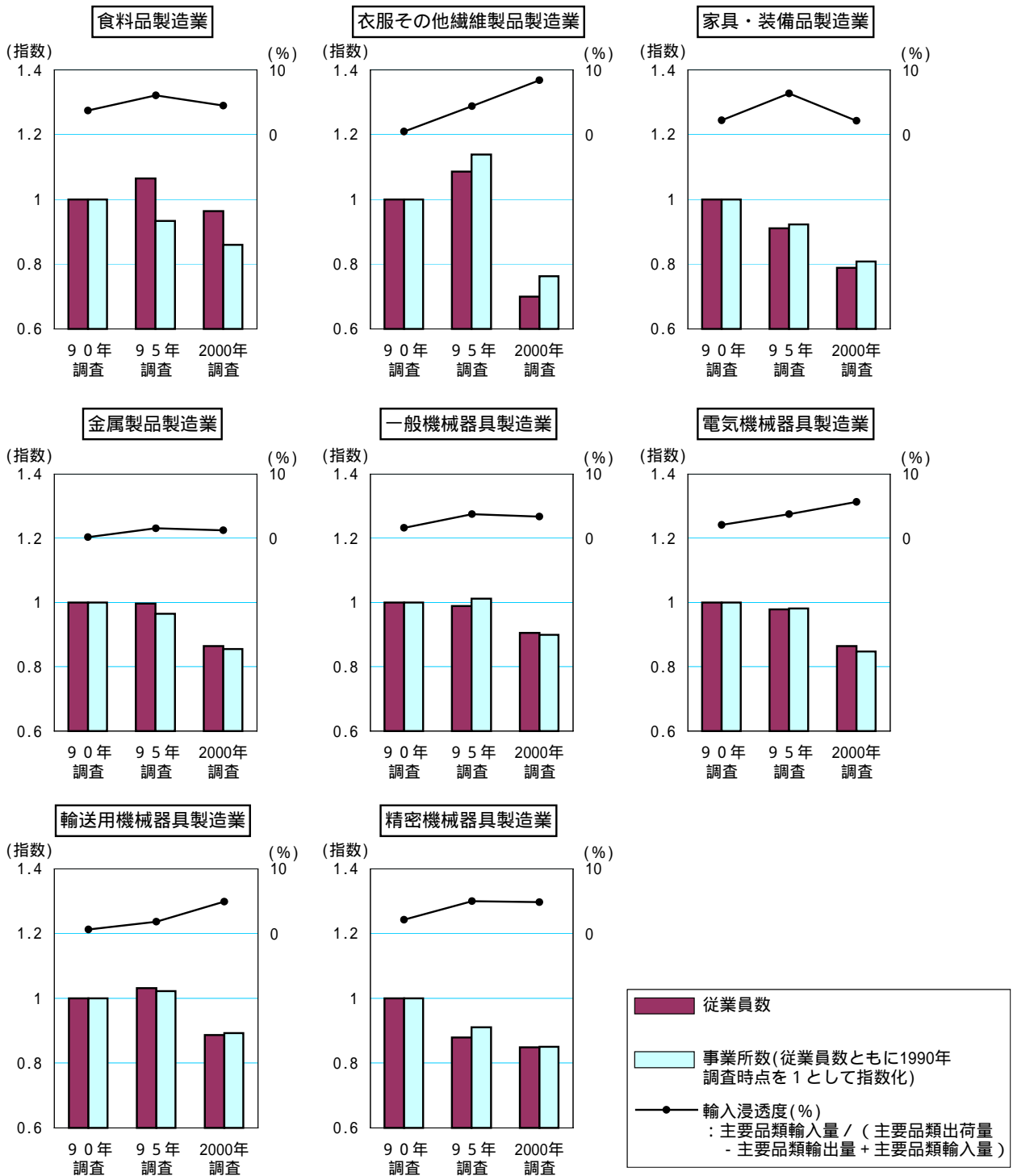
衣服・その他繊維製品製造業、家具・装備品製造業の輸出入量は、雑工業品の輸出入量と仮定。

金属製品製造業、一般機械製造業、電気機械製造業、輸送用機械製造業、精密機械製造業の輸出入量は、金属機械工業品の輸出入量と仮定。

・各年とも、実績は調査年の前年の実績である。(例：2000年調査 99年調査)

図3-3-40 主な業種別に見た従業員数、事業所数、輸入浸透度の推移

(年間調査 単位：%)



注：・各業種における主要品類は、図3-3-39に同じ。

・各年とも、実績は調査年の前年の実績である。(例：2000年調査 99年実績)